様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００４５９

研究課題名（和文）後期萬葉長歌における中国初学書・実用書の受容研究

研究課題名（英文）A study of the reception of Chinese texts for beginners and practical use In the long poems of the late Manyo period

研究代表者
奥村　和美（okumura, kazumi）

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：８０３２９９０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：　大伴家持とほぼ同時代に作られた和歌を収め、家持がその編纂に深く関与したと見られる『萬葉集』巻１６の作品の分析を主に行うことを通して、以下のようなことを明らかにした。
　和歌表現に初学書『孝経』や『論語』の一節を踏まえたもののあること、題詞や左注の文章に六朝志怪小説『搜神記』や初唐伝奇小説『遊仙窟』、或いは書簡文例集『杜家立成雑書要略』のような実用書などから得た表現が用いられていること、また、中国の宴席の場における詠物歌の方法が高度に応用されていること等である。これらはいずれも大伴家持が受容した中国文学の教養の実態とその具体的な利用のしかたを示すものと言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は、大伴家持を含む奈良時代の都で生活する官人達の教養のあり方を、当時受容された中国の初学書や実用書に即して、『萬葉集』の表現の上に、数々指摘したところに大きな意義をもつ。それだけでなく、家持が編纂に深く関与した巻16の和歌と散文の分析を通して、官人のゴシップ的興味のありようやゴシップ的興味が題詞・左注の述作態度や和歌の享受のしかたにも及んでいる諸相を具体的に明らかにし、そのことによって大伴家持の作品形成の背景をなすものを析出することができた。これらは今後、家持の特に越中国守期の長歌を分析する上で、重要な視点を提供するものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：　Through analysis of the Man'yoshu, Volume 16, which contains waka poems composed at about the same time as Otomo Yakamochi and in which Yakamochi appears to have been deeply involved in its compilation, the following points have been clarified.
　The waka expressions are based on passages from the first scholarly books “Kokyo” and “Rongo” the title and a left notes are based on the “Sojin-ki” a novel of the six dynasties in China and the “Yusenkutsu” a novel of the early Tang Dynasty or practical books such as the “Toka rissei zassho yoryaku” (A Collection of Examples of Letters and Documents), and the poem method used in Chinese banquet ceremonies is highly applied to this waka work. All of these indicate the actual state of the cultivation of Chinese literature that Otomo Yakamochi received, and the specific ways in which he used it.

研究分野：上代国文学

キーワード：万葉集　大伴家持　巻16　実用書

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

研究課題　後期萬葉長歌における中国初学書・実用書の受容研究　2021～2023 年度

１．研究開始当初の背景

後期萬葉（平城京遷都[710]～天平宝字三年[759]）において、46 首という比較的多くの長歌作品を残したのが大伴家持である。萬葉和歌史の最後尾に位置して、家持の長歌は、柿本人麻呂や山部赤人や高橋虫麻呂らの糟粕を嘗めるにすぎないと、もっぱら終末・衰退の相において捉えられてきた。表現としては、平板、冗長、散漫、陳腐というような否定的評価を受けることが多く、先行歌の模倣や継ぎ接ぎに終始していて、前代の長歌作品に比して劣るというのが研究者の共通した見解であった。

しかしながら、家持が、長歌において中国詩文を積極的に摂取し新しい試みをいくつかなしていることも事実である。たとえば、長歌を中国詩文の「賦」の形式に意識的に擬すことや、花鳥のような景物を主題に、詠物詩に倣って詠む「花鳥諷詠長歌」の制作、また美女の容貌の描写に『文選』をその李善注を踏まえて利用することなどが挙げられる。或いは、橘という新しい素材を詠む際に、中国における詠物的な賦や詩の方法を巧みに取り入れ、橘に橘氏を積極的に譬喩し寓意することを可能としている。

そのような中国詩文の幅広い受容において、表現の源泉となったものの中に、初等の識字教科書である『千字文』や同じく初学書『孝経』、及び初唐伝奇小説『遊仙窟』などがある。また、王羲之の尺牘・法帖など、書道的にも価値の高い書簡類や、正倉院蔵『杜家立成雑書要略』など書簡文例集である書儀の類も外せない。このことは研究代表者がこれまで、基盤研究(Ｃ)一般「後期萬葉長歌における教養基盤と表現形成の研究」(2014～2016 年度)、基盤研究(Ｃ)一般「和歌史における後期萬葉長歌の特質とその展開」(2017～2019 年度)らの科研費の助成を受けて行ってきた研究によって明らかにしてきたことである。これら中国の初学書・実用書・通俗書の影響の実態を、当時日本で用いられていた注の利用も含めて綿密に跡付け、萬葉和歌表現史全体の中で正確に位置づけることが求められる。

近年、家持長歌を主たる対象として論じる研究が増えてはきているが、奈良時代の政治状況に照らしての作歌動機の解明が中心であって、先行の長歌も視野に入れた和歌史的観点から、或いは、家持ら奈良朝知識人――下級官人を含む上代びとの教養、特に中国文学によって形成された教養基盤という共時的観点から、長歌表現の変容という現象をどのように分析・解明するか、ということについてはそれほど研究が進展していないように思われる。さらに、平安朝以降の萬葉歌受容という点については、『萬葉集』の伝本研究の立場からの立論はあるけれども、実際に訓詁注釈においてどのような中国辞書(字書)を用いたかということさえまだ明らかにされていない。このような昨今の研究状況を背景として本研究はスタートした。

２．研究の目的

本研究は、『萬葉集』のいわゆる後期萬葉の和歌文学作品、特に第四期を代表する歌人である大伴家持の長歌表現の特質の解明を主たる目的とする。通時的な視点から、家持の長歌が、先行の和歌表現を継承しつつ、六朝・初唐までの中国詩文、中でも初学書や通俗書或いは実用書の語彙や表現を受容していった過程を分析する。一方、共時的な視点から、同時代の歌人である大伴坂上郎女や大伴池主らとの交流、家持が深く編纂に関わったと考えられる巻 16 所載の長歌作品からの影響関係等、家持長歌と同時代長歌との相互交渉を、共有された上記中国詩文の知識教養をもとに検討する。後代においては、平安朝以降、萬葉長歌への関心が急速に薄れるが、その中にあって一部学識を備えた歌人達の間に見られる長歌受容の実態を漢字の訓詁の問題と関わらせつつ明らかにする。

３．研究の方法

期間中は、つぎのⅠ～Ⅲの３点からアプローチを試みる。

Ⅰ　【中国詩文からの摂取についての検討】

中国詩文からの表現の摂取を考察することによって、家持長歌の方法的特徴とそれが長歌表現に与えた影響を明らかにする。特に、知識人の教養の基盤となった『千字文』『孝経』などの初学書や奈良朝に流行した初唐伝奇小説『遊仙窟』、或いは書儀・書簡などの実用書・通俗書の利用の跡を具体的に探る。

Ⅱ　【同時代の作品の表現との比較対照】

同時代の作品、特に家持と贈答を行った大伴池主・大伴坂上郎女の歌や、家持が編纂に関わった巻 16 の作者不明の作品と比較対照することによって、家持長歌の表現の特質を探り、家持長歌を相対化する視点を得る。特に、巻 16 は題詞や左注の漢文部分に、説話的な叙述が多く、そこに用いられる語彙や語法の検討は、Ⅰで述べた中国詩文からの表現の摂取を考察する上でも非常に有益で、中国文学の和歌への受容の経路を具体的にたどることができる。

Ⅲ　【平安朝以降における受容の検討】

平安朝以降、仙覚による校訂を受ける以前の古次点期における萬葉長歌の受容について、藤原定家と作歌を競い、『萬葉集』を含む古典和歌についてほぼ同等の学識をもっていたと見られる

藤原家隆の和歌作品を中心に検討する。その際、当時用いられていたであろう中国辞書(字書)や日本漢和辞書に留意する。そのような平安朝以降における萬葉長歌の読解や実作における利用のしかたの実態を検討し、そのことを通して平安朝における、広い意味での訓詁学究明の手がかりとする。

４．研究成果

(1)2021 年度の成果

アプローチⅡの「同時代の作品の表現との比較対照」特に巻 16 の作品と比較対照することを重点的に行った。『萬葉集全注　巻第十六』の注釈メンバーによって定期的に開催される「巻 16 全注の会」において、担当箇所の注釈内容について発表を行い、問題点をメンバーと共有・討議した(本研究者の発表は、2021 年 3 月 4 日-3867 番歌、5 月 29 日-3811 番歌、9 月 23 日-3812～3813 番歌、12 月 4 日-3810 番歌)。そこで、巻 16 の和歌に、初学書『孝経』や『論語』の一節を踏まえた表現のあること、左注の文章に初唐伝奇小説『遊仙窟』や『搜神記』を利用した表現があり、歌を物語的な場において理解しようとする態度や、部分的にだが書儀語の利用が見られることなどを明らかにした。また、巻 16 作品の享受者の中心である下級官人の興味関心が、表現に大きく影響していることもわかってきた。これらの成果の一部を、論文「『萬葉集』巻十六・三八五七番歌考――『遊仙窟』という趣向――」(『第 17 回若手研究者支援プログラム 萬葉集巻十六を読む 報告集』奈良女子大学古代学・聖地学研究センター 2022 年 2 月、95-110 頁)としてまとめ、公表した。これは、アプローチⅠ「中国詩文からの摂取についての検討」の、知識人の教養となった初学書や奈良朝に流行した小説、或いは書儀・書簡などの実用書・通俗書の利用の跡を具体的に探るという点にも関わって、巻 16 の諸作品の作者や享受者だけでなく、大伴家持の教養の基盤にあるものをも具体的にあぶり出すことに成功している。

(2)2022 年度の成果

本年度も引き続き、アプローチⅠ「中国詩文からの摂取についての検討」のうち、「書儀・書簡などの実用書・通俗書の利用」についての検討を重点的に行った。具体的には、巻 16 題詞・左注の文を通して検討し、それらを「巻 16 全注の会」において報告、問題点をメンバーと共有・討議した。そこで、巻 16 の題詞・左注の文に、『杜家立成雑書要略』のような書儀・書簡などから得た表現が用いられていること、つまり、文学的に高度な達成をめざすわけではない、比較的、実用的な文章を作るときの工夫のしかたを具体的に指摘することができた。これは、家持をはじめとする奈良朝官人の基盤にある教養を明らかにしたというだけでなく、実際の利用の跡とその用い方を作品に則して端的に示した点で、これまでの研究を一歩推し進めたものと言える。これらの成果を、臺湾大學日本語文創新國際學術検討會(オンライン　2022 年 11 月 5 日）の基調講演(招待)で発表し、論文「『萬葉集』巻十六の文章と歌―『杜家立成雑書要略』との関連を通して―」としてまとめ『第 18 回若手研究者支援プログラム　報告集』(奈良女子大学古代学・聖地学研究センター　2023 年 2 月、64-77 頁)を通して公表した。さらに、同じく巻 16 の最終歌三首について、宴席の場における詠物歌の方法が高度に応用されていることを明らかにし、論文「巻十六「怕物歌三首」について」にまとめ『萬葉集研究』第 42 集(鉄野昌弘・奥村和美編集 塙書房 2023 年 3 月、225-256 頁)に発表した。このことは、アプローチⅡ「同時代の作品の表現との比較対照」とも関わって、家持における詠物歌の方法の受容と展開を考える上で大きな意義があり、確かな成果を得たということができる。

(3)2023 年度の成果

本年度も、Ⅰ の「中国詩文からの表現の摂取の考察」とⅡの「同時代の作品と比較対照」の 2 つのアプローチを中心に試みた。

『萬葉集』巻 16 の左注の文と和歌との関係を広く検討しなおし、それらを上代文学会秋季大会シンポジウム「『万葉集』巻十六の諸相」での講演(招待)「『萬葉集』巻十六の伝云型左注について」(於二松学舎大学 2023 年 11 月）にて発表し、他 2 名の出席者との討論や会場参加者との質疑応答を通して考察を深めた。巻 16 の「伝へて云く」で始まるいわゆる伝云型左注に見える、作者名が審らかでないことをことわる「姓名未詳」などの文言が、中国伝記文学の同様の表現のもつ効果を認識した上で、話の重要なポイントをあえて伏せることによって受け手の興味を引きつけ面白がらせようとする意図的な操作であることを指摘した。これは、大伴家持をはじめとする官人のゴシップ的興味のあり方を明らかにしたというだけでなく、ゴシップ的興味が左注の述作態度や和歌の享受のしかたにも及んでいることを明らかにした点で、この 3 年間の本研究の特筆すべき成果と言える。この成果を、同題の論文にまとめ『上代文学』132 号(2024 年 4 月)にて発表した。また同様に、論文「『萬葉集』巻十六・三八一〇番歌考」(『京都語文』 31、2024 年 2 月、95-110 頁)では、巻 16 の左注と歌との詳細な検討を通して、商取引の盛んな平城京で暮らす下級官人層の生活実感を基盤とした表現の特色を明らかにした。これらの成果はいずれも、平城京の官人であった家持の表現を考察する上で、欠くことのできない視点を提供する。

さらに、巻 16 の一部の長歌において巻 13 の長歌からの模倣摂取が見られるが、同様に、家持の巻 17 所載の長歌においても巻 13 長歌からの模倣摂取の見られる例がある。巻 16 の編纂作業を通してそのような方法に家持が触発され、それを家持が自身の長歌に応用したという過程が

考えられる。家持において、巻 13 長歌の模倣摂取がどのような表現意図及び方法意識のもとに行われたのか、家持長歌研究の新しい視点を得たことも本年度の大きな成果である。

一方、 大伴家持が「庄」で詠んだいくつかの歌について、中国詩文における「荘」――貴族の私有地であり、遊楽のための別荘でもある――における漢詩文製作との関係から検討を進め、成果を「大伴家持と荘園」(吉村武彦・吉川真司・川尻秋生編『シリーズ古代史をひらくⅡ 古代荘園』岩波書店、2024 年 3 月、303-317 頁)として公表した。これは、家持の中国詩文制作の場への関心と、同時代の橘氏の文雅の活動への関心との両方について論じたものである。

なお、着手が遅れていたアプローチⅢ「平安朝以降における受容の検討」については、上代から平安朝初期にかけて用いられていた代表的な中国字書である梁・顧野王撰の原本系『玉篇』の利用実態についての調査を開始した。小島憲之氏の先駆的研究により方向性が示されていた原本系『玉篇』の類書的利用について、さらにいくつかの興味深い具体例を見出すことができたが、まだ論文化には至っていない。この研究は、原本系『玉篇』を抄出して『篆隷万象名義』を作った空海の営為にも深く関わることから、本研究代表者が協力研究者として加わっている科研費基盤研究(Ｂ)「平安期における古代漢文学の質的変容解明にむけた空海作品からのアプローチ」(研究代表者 筑波大学 谷口孝介、2024～2027 年度)において継続する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 奥村　和美	４．巻 0
２．論文標題 『萬葉集』巻十六の文章と歌－『杜家立成雑書要略』との関連を通してー	５．発行年 2023年
３．雑誌名 第18回若手研究者支援プログラム 萬葉集巻十六を読むⅡ 報告集	６．最初と最後の頁 64-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 奥村　和美	４．巻 0
２．論文標題 『萬葉集』巻十六・三八五七番歌考――『遊仙窟』という趣向――」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 第17回若手研究者支援プログラム 萬葉集巻十六を読む 報告集	６．最初と最後の頁 95-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 奥村和美	４．巻 31
２．論文標題 『萬葉集』巻十六・三八一〇番歌考	５．発行年 2024年
３．雑誌名 京都語文	６．最初と最後の頁 95-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 奥村和美	４．巻 Ⅱ
２．論文標題 大伴家持と荘園	５．発行年 2024年
３．雑誌名 シリーズ 古代史をひらく Ⅱ(岩波書店)	６．最初と最後の頁 303-317
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 奥村和美	4．巻 132
2．論文標題 『萬葉集』巻十六の伝云型左注について	5．発行年 2024年
3．雑誌名 上代文学	6．最初と最後の頁 31～48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 奥村和美
2．発表標題 基調講演　『萬葉集』巻十六について――『杜家立成雑書要略』との関連を通して
3．学会等名 臺湾大學日本語文創新國際學術検討會（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 奥村和美
2．発表標題 『萬葉集』巻十六の伝云型左注について
3．学会等名 上代文学会秋季大会シンポジウム「『万葉集』巻十六の諸相」（招待講演）
4．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

1．著者名 奥村和美	4．発行年 2023年
2．出版社 塙書房	5．総ページ数 476
3．書名 『萬葉集研究　第42集』のうち「巻十六「怕物歌三首」について」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関